

# 入所施設における知的障害者の高齢化の課題

## —アンケート調査から—

石野 美也子・張 貞京

入所施設における知的障害者の高齢化の課題についてのアンケートを近畿一円の施設を対象に行った。その結果を分析することにより、今施設が抱える現状と課題を明確にした。結果からは、入所施設に暮らす高齢な知的障害者には、その施設を移ることを余儀なくされた場合でも、受け皿が極端に少なく、介護保険の利用も難しいという現状がわかった。介護保険と自立支援法の間で高齢な知的障害者は、まさしく制度の狭間にあり、その対応は急務であると言える。

キーワード：知的障害者、高齢化、狭間、知的障害者施設、アンケート

### 1. はじめに

急速な速さで訪れた高齢化の問題は、現在の日本における社会問題でもある。

内閣府による平成24年度版高齢者白書によると、我が国の総人口は、平成23（2011）年10月1日現在、1億2,780万人であった。65歳以上の高齢者人口は、過去最高の2,975万人（前年2,925万人）となり、総人口に占める割合（高齢化率）も23.3%（前年23.0%）になった。このような急速な高齢化による超高齢社会の到来は課題として「人生65年」という考え方の見直しや、認知症の増加ということを含んでいる。当然、社会保障は超高齢化に起こるそれらの課題に追いつかなければならないが、少子化と相まって追いつけないのが現状である。

それは知的障害者入所施設においても例外ではない。知的障害者の高齢化の問題は議論になって久しい。しかし、制度としてあまり発展していないのが現状である。そのような環境で入所している知的障害者はどのように高齢期を過ごしているのか、共に暮らしている生活施設

であるから、仲間の「老い」や「死」は利用者にとって、「自分のこと」として直結するはずである。高齢化の中で、利用者の「老い」や「死」に対する不安を和らげ、最後まで生活を共にするA施設の取り組みを知った。その取り組みをデス・エデュケーション（Death Education）の視点から過去2年にわたって研究してきた。

その結果から、仲間や家族の「老い」や「死」に対しての不安や悲しみを乗り越えるには、他の仲間や職員の存在が大きいことが分かった。また、A施設では、利用者の声を聞き、不安を取り除くために、その話題に触れないのではなく、積極的に「お話を聞く会」を設け、漠然とした不安を知識や、不安の共有という形で乗り越えてきた。その結果、仲間の老いや死を通して自分自身の老いや死に対する不安を軽減しているという結果が出た。

そこで、A施設以外の知的障害者入所施設では、利用者の「老い」や「死」に対する不安をどう捉え、どのように軽減しているだろうかという研究課題でA施設のあるB県にアンケート調査を行った。

その回答結果からは看取りや不安の軽減とい

うこともなされているが、入所施設の高齢化の課題、とりわけ介護が必要になってきたときの課題の大きさがうかがえた。そこで、再度、隣接する C 県、D 県にも同じ質問紙でアンケートを行った。その結果、知的障害者の高齢者の課題は 3 自治体とも似た傾向を示した。そのことから、さらに、3 自治体にアンケートを送付し、近畿一円を対象に調査を行った。

3 回目の調査は期日が短かったため回答数が少ないという反省があるものの、その結果には他の 3 自治体と同じく、入所施設の高齢化の課題が深刻であり、その解決は急務であることがうかがえる結果となった。

これらのことを踏まえ、本研究では調査報告として、アンケート結果の中から入所施設における知的障害者の高齢化の実態と「知的障害者施設の高齢化の課題」に焦点を当て分析することとした。

## 2. 研究方法

B 県、C 県、D 県の知的障害者入所施設にアンケートを郵送し、調査。

### 第 1 回調査：B 県

期日：平成 12 年 5 月中旬～6 月初旬

施設数：13 施設

回答数：7 施設（回答率 53.8%）

### 第 2 回調査：C 県、D 県

期日：平成 12 年 7 月中旬～8 月中旬

施設数：41 施設

回答数：21 施設（回答率 51.2%）

### 第 3 回調査：E 県、F 県、G 県

期日：平成 12 年 8 月下旬～9 月中旬

施設数：154 施設

回答数：58 施設（回答率 38%）

（グループホーム、ケアホーム、短期入所は除

く）

（アンケート用紙は巻末に掲載）

以上のアンケート調査の回答結果を集計、および分析により知的障害者の入所施設の現状と高齢化の課題をみる。

## 3. 結果

ライフステージにおいて思春期は障害の有無に関係なく同じだといわれている。高齢期もまた、同じような課題を持っていることがアンケート結果により見られた。

そこで問題となるのは、その施設の持つ特性にある。高齢者施設と知的障害者施設の違いは、生活施設として設立された知的障害者の入所施設はその歴史的な性格から見てもこのような長寿時代に対応できるようになっていない。そのため、介護に適した設計や、また職員の体制、および職域の違いなどが課題となる。以前の知的障害者施設の職員に求められたものは、利用者に寄り添い、その中で、よりよい生活ができるようにサポートすることであった。現代はこのことに加えて、介護が必要になった。その先には最後をどう迎えてもらうかという看取りの課題が見えてくる。これは、技術もちろん、職員が自分自身の人生観と向き合うことを余儀なくされる。入所施設の知的障害者の高齢化の課題は、知的障害者自身の課題と、職員の課題が複層している。

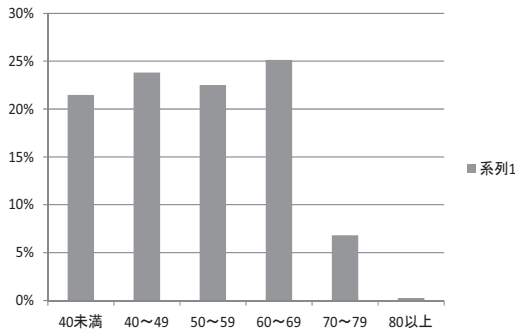
以下にアンケート調査の回答結果を示し、考察する。

### B 県におけるアンケート結果

B 県における入所施設利用者の年齢構成比は図 1 のとおりである。

B 県の知的障害者入所施設の利用者の年齢構

成比は、60～69歳が25%と最も多く、次いで40～49歳が24%、50～59歳が23%、70～79歳が7%、80歳代が0.1%である。



(図1) B県知的障害者施設入所利用者年齢構成比

職員にとって利用者が高齢になったと感じる年齢は54.3歳である。その理由として身体的な老いと、精神的な老いに対して回答を求めた。それぞれについて、回答施設数を示したものが表1、2である。

表1 身体面での老を感じる－B県

①転びやすくなった	5
②福祉用具を使う人が増えた	5
③食事に介助がいるようになった	7
④入浴に介助がいるようになった	5
⑤排泄に介助がいるようになった	2

(全7施設のうち、回答施設数)

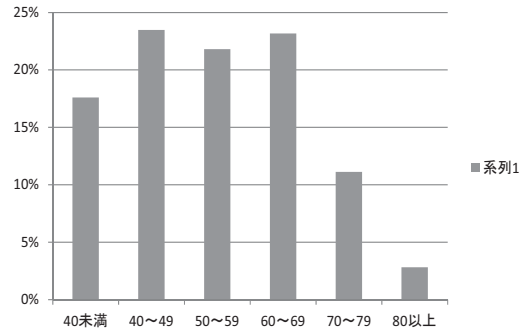
表2 精神面での老を感じる－B県

①仕事への意欲が感じられない	4
②人に会ったり、何かすることが面倒に感じているように思われる	3
③前のように笑ったり話したりしなくなった	4
④その他	1

(全7施設のうち、回答施設数)

## C県における調査結果

C県における入所施設利用者の年齢構成比は図2のとおりである。



(図2) C県知的障害者施設入所利用者年齢構成比

C県の知的障害者入所施設の利用者の年齢構成比は40～49歳までと60～69歳までが同じく23%で最も多い。次いで、50～59歳が22%、40歳未満が18%、70～79歳が11%、80歳以上も3%に及ぶ。

職員にとって利用者が高齢になったと感じる年齢はC県においては51.4歳である。それぞれについて、回答施設数を示したものが表3、4である。

表3 身体面での老を感じる－C県

①転びやすくなった	14
②福祉用具を使う人が増えた	13
③食事に介助がいるようになった	13
④入浴に介助がいるようになった	13
⑤排泄に介助がいるようになった	14

(全15施設のうち、回答施設数)

表4 精神面での老いを感じる－C県

①仕事への意欲が感じられない	7
②人に会ったり、何かすることが面倒に感じているように思われる	0
③前のように笑ったり話したりしなくなった	6
④その他	2

(全15施設のうち、回答施設数)

表5 身体面での老いを感じる－D県

①転びやすくなった	6
②福祉用具を使う人が増えた	4
③食事に介助がいるようになった	4
④入浴に介助がいるようになった	4
⑤排泄に介助がいるようになった	3

(全6施設のうち、回答施設数)

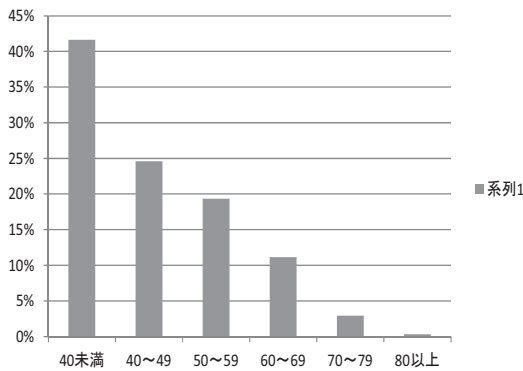
表6 精神面での老いを感じる－D県

①仕事への意欲が感じられない	2
②人に会ったり、何かすることが面倒に感じているように思われる	0
③前のように笑ったり話したりしなくなった	0
④その他	2

(全6施設のうち、回答施設数)

#### D県における調査結果

D県における入所施設利用者の年齢構成比は図3のとおりである。



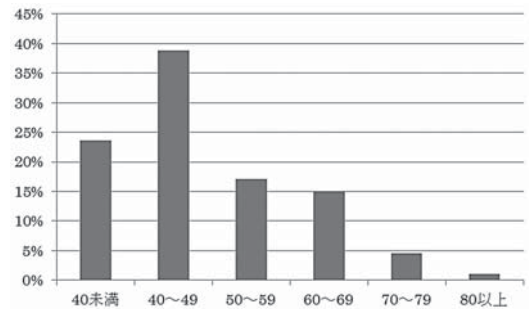
(図3) D県知的障害者施設入所利用者年齢構成比

D県における知的障害者入所施設の利用者の年齢構成比は、40歳未満が最も多く42%、次いで40～49歳で25%、50～59歳と60～69歳が同じく11%、70歳～79歳が3%、80歳以上は0%という比較的若い層が多いといえる。

職員にとって利用者が高齢になったと感じる年齢は無回答1件を除き、平均54.8歳である。それぞれについて、回答施設数を示したものが表5、6である。

#### E県における調査結果

E県における入所施設利用者の年齢構成比は以下のとおりである。



(図4) E県知的障害者入所利用者年齢構成比

E県における知的障害者入所施設の利用者の年齢構成比は、40～49歳までが最も多く39%で最も多く、次いで40歳未満の24%、50～59歳までの17%、60～69歳までの15%、70～79歳までの5%、80歳以上の1%という順になる。職員にとって利用者が高齢になったと感じる年齢は平均55.4歳である。それぞれについて、回

答施設数を示したものが表7、8である。

表7 身体面での老いを感じる－E県

①転びやすくなった	15
②福祉用具を使う人が増えた	11
③食事に介助がいるようになった	10
④入浴に介助がいるようになった	9
⑤排泄に介助がいるようになった	8

(全15施設のうち、回答施設数)

表8 精神面での老いを感じる－E県

①仕事への意欲が感じられない	5
②人に会ったり、何かすることが面倒に 感じているように思われる	2
③前のように笑ったり話したり しなくなった	5
④その他	4

(全15施設のうち、回答施設数)

表9 身体面での老いを感じる－F県

①転びやすくなった	25
②福祉用具を使う人が増えた	25
③食事に介助がいるようになった	23
④入浴に介助がいるようになった	18
⑤排泄に介助がいるようになった	20

(全32施設のうち、回答施設数)

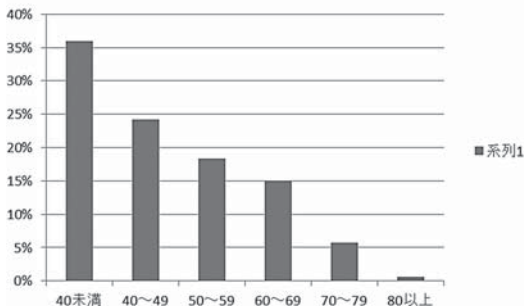
表10 精神面での老いを感じる－F県

①仕事への意欲が感じられない	13
②人に会ったり、何かすることが面倒に 感じているように思われる	8
③前のように笑ったり話したり しなくなった	10
④その他	3

(全32施設のうち、回答施設数)

## F県における調査結果

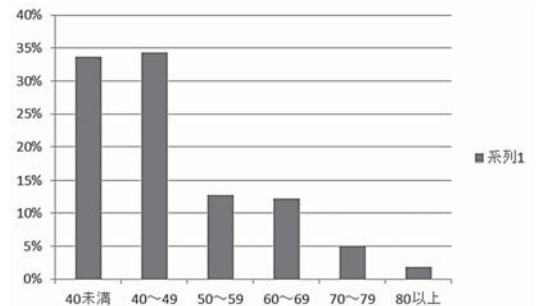
(図5) F県知的障害者入所利用者年齢構成比



F県における知的障害者入所施設の利用者の年齢構成比は、40歳未満が36%と最も多く、次いで40～49歳が24%、50～59歳が18%、60～69歳が15%、70～79歳が6%、80歳以上が1%となる。比較的若い層が多いことが分かる。

職員にとって利用者が高齢となったと感じる年齢は無回答1件を除き、平均50.4歳である。それぞれについて、回答施設数を示したものが表9、10である。

## G県における調査結果



(図6) G県知的障害者入所利用者年齢構成比

G県における知的障害者入所施設の利用者の年齢構成比は、40～49歳が34.3%と最も多く、次いで40歳未満が33.7%、50～59歳が15%、60～69歳が12%、70～79歳が5%、80歳以上が2%である。49歳未満が68%と比較的若いことが分かる。

職員にとって利用者が高齢となったと感じる年齢は55.4歳である。それぞれについて、回答施設数を示したものが表11、12である。

表 11 身体面での老いを感じる－G 県

①転びやすくなった	8
②福祉用具を使う人が増えた	4
③食事に介助がいるようになった	7
④入浴に介助がいるようになった	7
⑤排泄に介助がいるようになった	5

(全11施設のうち、回答施設数)

表 12 精神面での老いを感じる－G 県

①仕事への意欲が感じられない	4
②人に会ったり、何かすることが面倒に 感じているように思われる	2
③前のように笑ったり話したり しなくなった	5
④その他	3

(全11施設のうち、回答施設数)

次に知的障害者入所施設における現状からみた課題についてのアンケート結果を制度における課題、医療における課題、高齢な利用者に対する理解と対応、高齢化に関する環境面における課題の4つに分類し、分析する。

### 1) 現行の制度における課題

#### 受け皿について

- ・グループホームやケアホームに入所している。方がホームでの生活が困難になったときに高齢者施設に入居がスムーズにできるかどうか。
- ・高齢者施設での対応が難しくなった高齢の方の受け入れ先がない。
- ・施設での対応が困難になった場合、次の施設（老人ホームなど）の受け皿がない。障害の程度により断られるケースが多い。
- ・老人施設への受け入れがあれば良い。
- ・高齢あるいは親亡き後の入所施設やグループホーム、ケアホームが圧倒的に不足している。

- ・医学的アプローチが必要になった時、施設が次の受け入れ先を探さなければならない。相談窓口があれば良いと思う。
- ・ご本人の問題もちろんだが、ご家族の精神面や、身体的不安と負担が大きい。介護の必要度が高いためケアホームでの受け入れがスムーズにいかない面があり、「地域での生活」を営むための受け皿が少ない。
- ・入所者の高齢化に伴い、この次に行く所がない。そのため、入所者がどんどん年齢を重ね、児童の施設で問題となっている超過児のような状態になる。
- ・知的障害者の高齢施設が必要だと思う。また高齢や認知症の方が障害者支援施設での生活が難しくなった時に次の受け皿を確保することが必要。

#### 介護保険など制度に関するもの

- ・介護保険施設への移行の難しさ。
- ・現施設で対応できる施設作り（のための）法整備
- ・現行の施設基準では対応が困難
- ・65歳を過ぎれば介護保険が優先されるというが、実際には、障害者サービスを利用している方が多い。
- ・本人や家族にとって、安心して老いを迎えることができる制度が必要。（特養施設機能の充実）
- ・現行では障害の有無にかかわらず、65歳以上は介護保険で対応することになっているが、実際には知的障害者の方を受け入れる余地がない状況である。また自立支援法の中にも高齢の知的障害者を想定した環境および人的な基準がなく、障害者の高齢化対策に注意が向けられていない危機感がある。
- ・利用できるサービスがない。



## 2) 医療における課題

- ・医療機関の理解。老いを理解してもらうこと
- ・加齢による疾患（高血圧、心臓疾患など）に自分自身で養生できないことが多い。
- ・通院先（理解のある医師）、通院手段の確保。
- ・ターミナルケアの位置づけ。
- ・施設での看取りと医療と福祉の充実。
- ・医療機関との連携が難しい。
- ・医療ケアが必要になった時の職員不足。
- ・本人からの訴えが少ないため、職員が身体的変化に気づくことができるか。

## 3) 高齢な利用者に対する理解と対応

- ・加齢による変化の理解と受容。
- ・施設の中で介護を必要とする人と、若く様々な経験等が必要な方を同じ施設で取り組むことに多くの課題がある。
- ・認知症と知的障害を両方持ち合わせているので、支援の検討をしていく必要がある。
- ・両親がなくなったりして、家族がいなくなることにより精神面にも問題が増加していくと思われる。
- ・どんなに障害が重くても、本人なりに死というものを受け止めておられるように感じ、家族の葬儀には必ず出席させてきた。
- ・知的障害を持つ人たちも私たち同様に、年をとっていくという私たち側の自覚とかまえ。
- ・人材の育成と高齢者支援（老人介護とは違う形で）
- ・職員のスキルアップ
- ・介護度が高くなるにつれ、マンパワーが一層必要になるため、職員の確保。

## 4) 高齢化に関する環境面における課題

- ・終末期を含めた高齢の人たちの生活の場を特化してもらう、対応するのか、またはケース

バイケースで現状の施設体系で対応するのか、これらについて施設が判断し、取り組むのか、制度によって対応するのか…

- ・個別の環境確保と支援（ソフト面）
- ・高齢化になったときに施設の環境が対応できない。
- ・バリアフリーの強化
- ・高齢棟の設置及びハード面の整備
- ・開所したときは高齢化の問題を考えていなかったで段差があったり、スロープが滑りやすいなどの問題が多い。
- ・環境整備が生活者のニーズに追いつけない。

## 4. 考察

調査結果を年齢構成で見ると、各自治体とも、およそ40～49歳の層が厚いことがわかる。次で40歳未満が続く。年齢だけで見ると、一般的な高齢化とは傾向が異なるように思える。

しかし、職員が利用者を高齢になったと感じる年齢を見ると、6自治体平均で53.6歳である。

このことから、身体や精神に高齢化の現象が見られ始めるのは50歳前半である事がうかがえる。共に過ごしている職員の感じる利用者の老いは、知的障害者の高齢化の現状を表している。

それは、次の身体的な老い、精神的な老い、という項目の回答を見てもわかる。ほとんどの施設で介護や介助を必要とする利用者がおり、精神的には無気力になったり、会話が減ったり、感情の起伏が激しくなるという高齢者に見られる現象が多く見られる。また、認知症を発症しているケースも見られる。このことは70歳、80歳の利用者がパーセンテージでは低くても、それだけでは計れない高齢化の現状があることを示唆している。さらに、現在40～49歳未満の層が厚いと言うことは、今後、ますます高齢化に

よる課題を増し、支援が難しくなることを意味している。

次に、自由記述の高齢化に関する課題の回答を4項目で見えていくと、まず、現行の制度における課題では、施設での介護やその他医療的なことに関して、技術的な問題、人員の確保等で施設で対応することが難しくなっても受け皿がない。グループホームやケアホームも圧倒的に少ない。また、高齢者施設でも受け入れを断られるなど受け皿の少なさが大きな課題となっている。また、一方で、介護保険が利用できる年齢になっても、介護保険のサービスはほとんど利用出来ない。「自立支援法の中にも知的障害者を想定した環境および人的な基準がなく、障害者の高齢化に注意が向けられていないという危機感がある。」という記述に見られるように、急激な高齢化に環境や医療を含めたネットワークが追いついていない。

医療における課題では、自分で自分の状態をコントロールしたり、伝えたり出来にくいので職員がどこまで気付くことが出来るか、また、医療機関との連携や理解を求めることが難しいという現状がある。

高齢な利用者に対する理解と対応という課題では、高齢になった変化を受け止めていくことが中心になる。変化において身体面では、介護が必要になったり、精神的な面では、老化における不安定さに対応していけるスキルを身につけていかなければならないことが挙げられる。

最後に、環境面における課題では、今までこのような高齢化がくると考えておらず、設備がなかったり、マンパワーの不足ということが挙

げられる。また、最後まで施設で生活することを考えると看取りや、不安軽減のための取り組みが必要になり、職員自身の思いと向き合うことも生じてくる。安心して暮らしてもらうためには、高齢棟の設置も考えなければならない。しかし、「終末期を含めた高齢の人たちの生活の場を特化してもうけ、対応するのか、またはケースバイケースで現状の施設体系で対応するのか、これらについて施設が判断し、取り組むのか、制度によって対応するのか…」という記述に見られるように、施設がそれぞれ考えて動くことではなく、ある基準までは、制度のなかで考えていくべき課題ではないかと考える。

このように施設における課題を見ていくと、高齢な知的障害が老後を安心して暮らせる政策は皆無で、入所している高齢知的障害者は制度の狭間にあるといえる。その狭間で利用者と職員が、何とかしようと日々を過ごしていることがうかがえる。

知的障害者の高齢化の課題は、施設や本人、その家族だけの問題ではない。

介護保険の時のように社会で考え、個人の問題から社会化していかなければ何も変わらない。年齢的にも、その対策は急務である。

今後も具体的な課題を取り上げ、対策に必要な部分を明確にし、社会化していくことを目標としたい。

なお、本研究は京都文教短期大学特別研究助成によって行った。

(次頁にアンケート用紙掲載)



利用者的高齢化に関するアンケート

■施設名： \_\_\_\_\_

■回答者：年齢（ \_\_\_\_\_ 歳代）、性別（ 男 ・ 女 ）、  
職種（ 管理職 ・ 指導員 ・ 看護職 ・ その他 \_\_\_\_\_ ）

1. 利用者数についておたずねします。（ \_\_\_\_\_ 名）

2. 利用者の年齢構成についておたずねします。

	40 歳未満	40 歳～49 歳	50 歳～59 歳	60 歳～69 歳	70 歳～79 歳	80 歳以上
男						
女						

3. 利用者が高齢になったと感じるのは何歳ぐらいからですか。（個人差はあると思いますが、だいたい何歳ぐらいと感じられますか）（ \_\_\_\_\_ 歳位）

3-1. どのような時にそう感じられますか。

（ \_\_\_\_\_ ）

4. 身体面で利用者の老いを感じることがありますか。（該当番号に✓を入れ、大まかな人数を記入してください）

①転びやすくなった。（ \_\_\_\_\_ 名）

②車いすなど福祉用具を使う人が増えた。（ \_\_\_\_\_ 名）

③食事に介助がいるようになった。（ \_\_\_\_\_ 名）

④入浴に介助がいるようになった。（ \_\_\_\_\_ 名）

⑤排泄に介助がいるようになった。（ \_\_\_\_\_ 名）

⑥その他 \_\_\_\_\_ （ \_\_\_\_\_ 名）

5. 精神面で利用者の老いを感じることがありますか。（当てはまる番号を✓してください）

①はい ・ ②いいえ

5-1. はいと答えた方におたずねします。それはどのようなときでしょうか。

（複数回答可・当てはまる番号を✓してください）

①仕事への意欲が感じられない。

②人に会ったり、何かすることをめんどうだと感じているように思える。

③前のように話したり、笑ったりしなくなった。

④その他 （ \_\_\_\_\_ ）

6. 環境や身体面で利用者が老いや不安を感じているように思うことはありますか。

（複数回答可・当てはまる番号を✓してください）

①自分の身体的変化についての不安を感じていると思う時がある。

②疾患の増加による不安を感じていると思う時がある。

③家族の老いについて不安を持っていると感じられる時がある。

④家族の死に際して不安を持っていると感じられる時がある。

⑤仲間の老いや死について不安を感じている時があると思われる。

- 6-1。 その不安に対して、どのように対応されていますか。  
( )
- 6-2。 不安を軽減するための取り組みをされていたら教えてください。  
( )
- 7。 利用者が家族の死を経験しているかについておたずねします。  
①経験している ( )名 ・ ②経験していない ( )名
- 8。 利用者が仲間の死を経験しているかについておたずねします。  
①経験している ( )名 ・ ②経験していない ( )名
- 9。 職員が利用者の死を経験しているかについておたずねします。  
①経験している ( )名 ・ ②経験していない ( )名
- 10。 利用者の身体が弱って介護が必要となったとき、最後を看取するという意識はありましたか。(当てはまる番号を✓してください)  
①ある                      ②特にない  
③その他 ( )
- 10-1。 特にないと答えた方でライフサイクルの延長線上に介護や死を意識していましたか。  
(当てはまる番号を✓してください)  
①していた                      ・                      ②特にしていない
- 11。 施設でお別れの会（お葬式）を行いますか？(当てはまる番号を✓してください)  
①行う                      ・                      ②行わない  
③その他 ( )
- 12。 利用者が近い人の死をどのように乗り越えていると思いますか。  
(当てはまる番号を✓してください)  
①乗り越えていない  
②仲間の存在によって乗り越えている  
③家族の存在によって乗り越えている  
④職員の存在によって乗り越えている  
⑤その他 ( )
- 13。 利用者の高齢化に伴い、不安軽減や介護などにおいて工夫している点や、独自の取り組みがあればお聞かせ下さい。  
[ ]
- 14。 最後に、知的障害者の高齢化において課題と思われることを教えてください。  
[ ]

ご協力ありがとうございました。